富山市飯野新屋遺跡
発掘調査概要

1995年３月

富山市教育委員会

富山市飯野新屋遺跡発掘調査概要

１９９５年３月

富山市教育委員会

例　言

1　本書は、南砺自動車工業の自動車修理工場建設に伴う飯野新屋遺跡発掘調査の概要である。

2　調査は、富山市教育委員会が主体となって実施した。
　現地調査は、平成５年10月13日から平成５年11月18日にかけて行った。
　遺物整理及び報告書作成は、平成６年５月２日から平成７年３月30日にかけて行った。

3　調査は、富山市教育委員会学芸員吉川知明・岡小林高範・岡堀沢祐一が担当し、山崎栄が補助した。

4　木製品の樹種同定については、富山県林業技術センター木材試験場に依頼し、主任研究員長谷川益夫氏の報告を本書に掲載した。

5　調査にあたり、富山県教育委員会文化課、富山県埋蔵文化財センターから指導を得た。また調査から報告書作成に至るまで次の方々や諸機関からご協力をいただいた。記して謝意を表します。
　舟崎久雄、株式会社ハウジング林、株式会社野光組（順不同・敬称略）

6　遺構記号は、溝：SD、井戸：SE、穴：SK、ピット：Pとし、記号の後に通し番号を付けた。

7　発掘調査及び出土品整理参加者
　旭井ユキエ、石井精一、大田久美子、金森愛子、鹿野碩子、沢田美紀代、土田多美子、野上洋子、本田富子、深山スミ子、深山静枝、深山正信、藤井たず子、三浦由実子、米田光子（以上現地調査）
　塩田明宏、古沢亜希子（以上遺物整理）

8　出土品及び原図・写真類は、富山市教育委員会が保管している。

9　本書の執筆は、吉川、山崎が行い、各々の責は文末に記した。

目　次

Ⅰ　遺跡の位置と環境　（吉川）……　1
Ⅱ　調査の経緯　（吉川）……　2
Ⅲ　遺構と遺物　（吉川・山崎）……　4
Ⅳ　富山市飯野新屋遺跡出土井戸枠の樹種識別結果（長谷川）……　15
Ⅴ　まとめ……（吉川・山崎）……　22
報告書抄録……　26
写真図版……　27

Ⅰ　遺跡の位置と環境

飯野新屋遺跡は、富山市街地の北東約４kmの富山市飯野及び新屋地内に位置する古墳時代前期を主とする集落遺跡である。遺跡は、東を流れる常願寺川と西を流れる神通川との複合扇状地扇端部に立地し、前者とは約２km、後者とは約2.8km隔たっている。標高は7.5mで、海岸線までは約3.5kmの距離がある。

遺跡周辺は水田耕作地帯となっており、圃場整備等によって整地がなされたため平坦な地形を呈している。しかし遺跡の東端を南北に流れる排水路の東側は約50cm程度高く、また遺跡の西側は約150mほど平坦地が続き、約50cm程度落ちて低くなるといった微地形が認められ、西側の低湿地に面した微高地に遺跡が立地していたことがわかる。この低湿地は、現在でも浣んだ排水路として名残をとどめている。

遺跡周囲の扇状地上においては比較的小河川の発達があり、これらの小河川に添って南北に長い微高地が形成され

第１図　飯野新屋遺跡（１）**とその周辺の遺跡**（１：25,000）

１飯野新屋遺跡　２宮町遺跡　３小西北遺跡　４三上遺跡　５三上Ⅱ遺跡　６浜黒崎悪地遺跡　７野中新長堀遺跡　８宮条南遺跡　９高島島浦遺跡　10高島遺跡　11針原中町Ⅰ遺跡　12針原中町Ⅱ遺跡　13宮成遺跡　14新屋殿田遺跡　15米田大覚遺跡　16水落西遺跡　17水落南遺跡　18豊田中吉原Ⅱ遺跡　19犬島遺跡　20豊田大塚遺跡　21豊田中吉原遺跡　22下冨居遺跡　23豊田遺跡

ている。この微高地上の平坦面は50～100mの幅をもち、遺跡はこの上に立地するものが多い。河川部分は現在改修により幅1～2m程度になっているが、昭和前期までは4～5mの幅を有していたといい、この部分ではシルト層が発達する。

扇状地扇端部における遺跡の変遷についてみると、縄文晩期前半に出現し、弥生時代中期から古墳時代前期に遺跡数が増える。奈良時代以後は比較的多くの遺跡が営まれるが、戦国時代には特に顕著である。

飯野新屋遺跡が営まれる直前の弥生時代後期には、東方の宮町遺跡において環濠集落の一部と推定される濠跡や祭祀井戸群が発見されており、飯野新屋遺跡出現の背景と考えることができる。古墳時代前期には、遺跡の西方1.7kmに初期古墳であるちょうちょう塚が築造される。このちょうちょう塚を中心とした半径2.5kmの範囲内には、弥生時代後期から古墳時代前期の遺跡が12か所存在する。特にちょうちょう塚の東側にはそのうち9遺跡が集中しており、古墳形成の背景となった遺跡群と推定される。

戦国時代には遺跡周辺に城館・居館が出現する。豊田城をはじめ、宮町遺跡や小西北遺跡では居館が発見されている。特に小西北遺跡の居館は濠も大きく、家紋をかたどったと考えられる文様を配した漆皿の出土から、伝承の神保氏館ではないかとの推論が提起されている。飯野新屋遺跡からは中世の遺物も出土しており、未調査部分に中世集落の存在が考えられる。

Ⅱ　調査の経緯

飯野新屋遺跡は、昭和49～50年に行われた富山市域の分布調査によって発見され、右114新屋遺跡として「富山市遺跡地図」に登載され、周知の埋蔵文化財包蔵地として知られることになった。

調査地の東に接して市街地周辺の幹線道路である富山環状線が走る。この建設に伴って昭和58年及び昭和61年に発掘調査が実施され、祭祀井戸のある古墳時代前期の集落跡が発見されている。

現在環状線は富山市遺正地区まで4車線が開通し、交通量が飛躍的に増加した。これに伴い道路沿線の開発も南側から順次行われてきている。

平成5年当該地に自動車修理工場移転新築の計画が南砺自動車工業から代理人株式会社ハウジング林を通じて市教育委員会へ照会があった。開発予定地は、遺跡のほぼ北端にあたる場所であるため、1,688㎡の開発予定区域全域を対象とした遺跡所在状況を確認するための試掘調査が必要と判断された。このため、市教育委員会において試掘調査を実施する旨を通知し、平成5年8月11日から8月12日まで2日間にわたり調査を実施した。

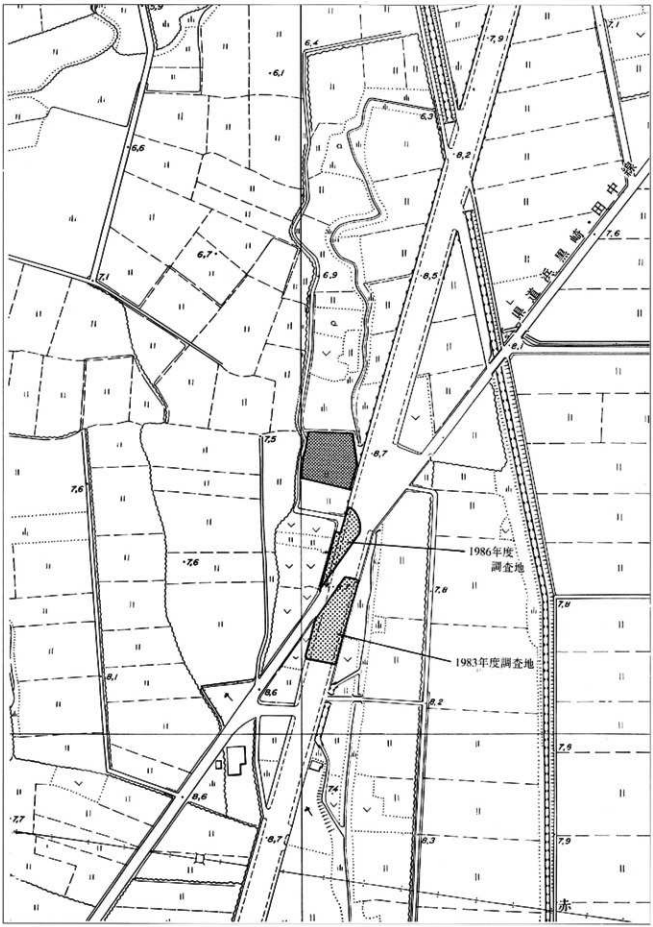
試掘調査は5か所の試掘トレンチを設定して行った。その結果、南側半分の約1,100㎡に遺跡が所在することが明らかになった。水田耕土直下に遺構が所在し、遺物包含層はほとんどが失われていた。溝やピットが数か所確認され、古墳時代前期の土器等が出土したため、当該時期の集落跡が存在すると考えられた。

試掘調査結果について株式会社ハウジング林を経由して南砺自動車工業へ通知し、遺跡の保護措置について協議を行った。工場建地は他になく工事は行いたいという意向が強く、やむなく遺跡全域について発掘調査を実施することとなった。

発掘調査及び出土品整理の方針については、平成5年10月5日付けで南砺自動車工業と協定を締結し、現地調査は現物支給を受ける形で実施し、出土品整理は市に委託して実施することとした。

現地調査は、富山市教育委員会が主体となって平成5年10月13日から同年11月17日まで行い、11月18日付けで引渡しを完了した。

出土品整理は、平成6年5月2日に委託契約を締結し、同日から平成7年3月30日まで行った。



第２図　調査区（中央の濃いアミ点スクリーン部）**とその周辺の地形**（１：2,500）

Ⅲ　遺構と遺物

1　概要

調査では、古墳時代前期の井戸１基、溝３条、平安時代の溝１条、中世の溝２条が検出された。他に井戸１基があり、古墳時代以降と考えられるが所属年代は不明である。

出土遺物には、古式土師器、土師器、須恵器、土師質土器、珠洲焼、越中瀬戸焼、磨石、砥石、碧玉剥片がある。古墳時代前期、平安時代、中世、近世にわたるもので、このうち遺構に伴って検出されているのは、古墳時代前期、平安時代、中世のものである。　（吉川）

2　基本層序

第１層水田耕作土、第２層黒色を呈する遺物包含層、第３層黄灰色シルト質砂土の上面が遺構検出面となる。井戸SE03の調査に伴い、第３層以下の土層を確認した。第４層黄褐色シルト質砂土、第５層暗黄灰色シルト質砂土、第６層暗灰色シルト、第７層黄褐灰色粘質シルト、第８層灰色粘質シルト、第９層淡灰褐色砂、第10層明灰褐色シルト質砂、第11層黄褐色砂、第12層灰色粗砂で、湧水層である。井戸SE03の底面はこの層に至る。　（山崎）

3　井戸

ＳＥ03（第４図）　調査区の南部Ｘ20Ｙ30において検出した。掘り方はほぼ円形状をなし、二段に掘られる。上部は直径1.45mで検出面から深さ1.1m、下部は直径0.84mで深さ1.4mを測る。底面径は0.68mである。井戸枠は、丸太を刳り抜いて分割した板を組み合わせた構造で、平面形は円形または楕円形と推定されるが、南半分は崩壊のため原形を留めていない。刳り抜かれた丸太材の推定直径は約80cmで、これを17～52cmの幅で７枚に分割し、そのうちの６枚を使っている。板材の合せ目端面はきれいに面取りがなされ、隙間なく仕上げられている。板材をつなぎ合せる構造はない。板材の厚さは２～3.5cmを測る。井戸底面からの立ち上がりは最高58cmが残存する。板の表面には焦げた跡が認められるものがある。

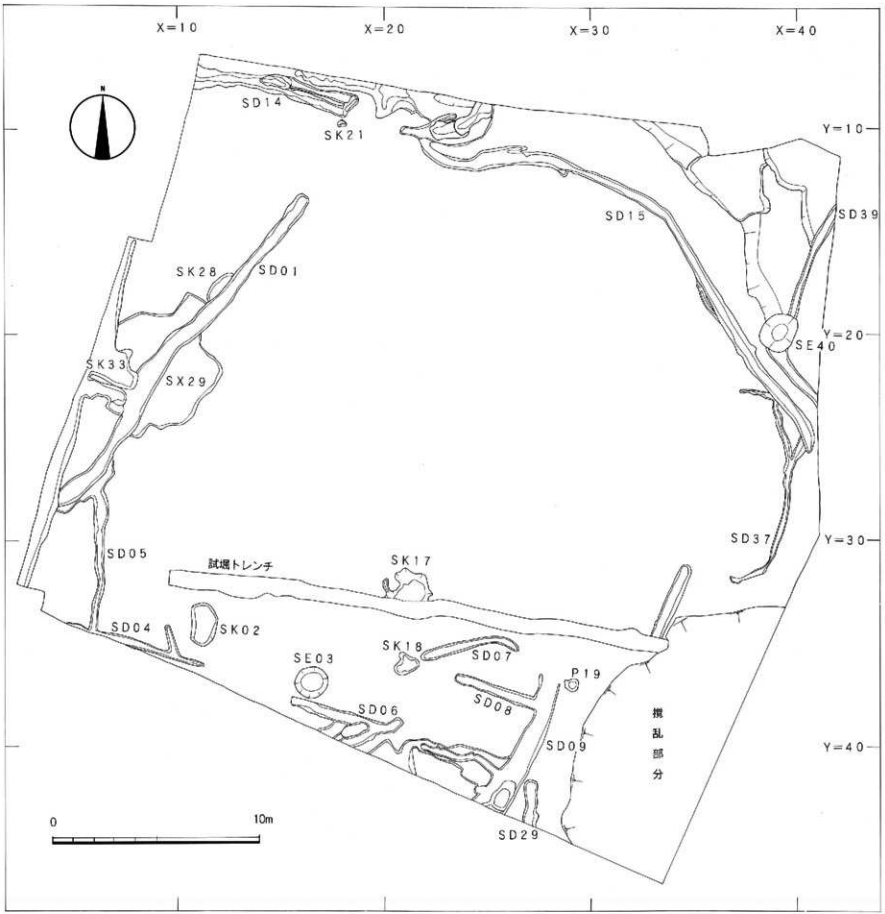
井戸枠の下部から十字に組んだ長方形の板材が出土した。この板材は、井戸底面から約10cm浮いた部分にあり、底面と板材下面の間に介在する土は灰色粗粒砂で地山と同じ質の砂土であることから、井戸枠埋設後に置かれた可能性が高い。板材は、50×14cm、厚さ２～３cmのもの、60×12cm、厚さ２～３cmのものがあり、後者の中央端部に1.5×3.5cmの方形のほぞ穴があるが、下の板との交差部分にあって使用されないことから、転用品と考えられる。

井戸枠の痕跡は黒色土として土層断面に表れており、井戸の廃絶が比較的短時間に行なわれたと考えられる。井戸枠内からは古墳時代の土器が出土した。中位からの出土が多く、底面付近はほとんど見られない。

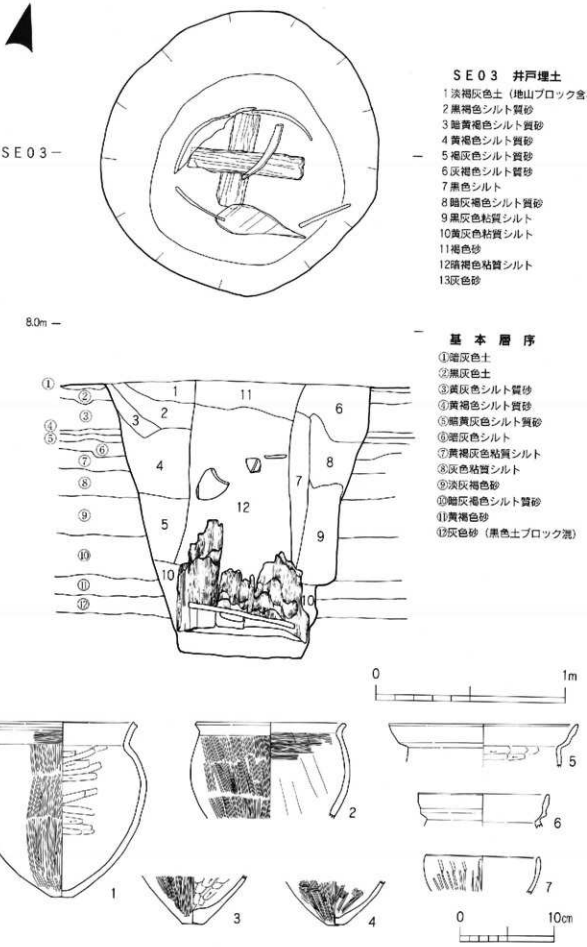
掘り方の埋土は、４層に分かれ灰色～黄灰色の粘質シルト土である。

井戸の底部は第12層に至り、良好な湧水層となっており、現在でも水が湧く。

出土遺物は、甕（１～５）、鉢（６,７）がある。甕の外面は全て刷毛目のちヘラ磨きで、炭化物の付着がある。内面はヘラ削りのものと刷毛目調整のものがある。１は、くの字状口縁を呈し、内面はヘラ削りである。口径15.6cm,高



第3図　遺構全体図（1：200）



第4図　井戸SE03　遺構（1/20）・出土遺物（1/4）

さ18.7cm。胎土は密で、色調は淡黄橙色を呈する。2は、くの字状口縁で内面はヘラ削りである。口径16cm、色調は灰褐色である。3は胴部下半で内面はヘラ削りである。色調は灰褐色で胎土に粗砂を含む。4は胴部下半で内面は縦と横の刷毛目調整である。色調は灰褐色を呈する。5は小型甕で、口径14cm。色調は黄褐色を呈する。6は複合口縁で、口径14cm、胎土は密で、色調は黄褐色を呈する。7は椀状を呈し、外面にはヘラ削りがなされる。口径12cm、色調は褐色を呈する。古墳時代前期に属する。

SE40 調査区の北東部X40Y20において検出した素掘井戸である。河川跡と思われる灰白色の落ち込みの発掘中に確認した。規模は直径200cm、深さ70cm、上面プランはほぼ円形となる。井戸枠等の施設はない。覆土は灰色シルトの単層で、底面付近の地山は灰色粗砂の湧水層に至る。出土遺物はなく、古墳時代以後のものと考えられる。

4 溝

SD01（第5図） 調査区の西側にあり、南北方向に長さ20mを検出した。幅50～75cmで、深さ20cmを測る。北側にいくにつれ浅くなる。SX29と重複し、SD01が新しい。

出土遺物には、小型壺(1)、甕(2～4)、砥石製品(5)がある。1は小型壺の底部で径5.2cm。外面ヘラ削りのち磨き、内面ヘラ削り。色調は黄褐色を呈する。2は、複合口縁の甕で口径20cm。胎土に細粒砂が多く含まれる。3は複合口縁の小型甕で擬凹線文を施す。口径14cm。長石粒を含む。色調は赤褐色を呈する。4は甕の下半部で底径7cmである。色調は黄褐色。古墳時代前期に属する。

SD07（第6図） 調査区の南側にあり、東西方向に4.8mを検出した。南に向かって弧を描く。土器が西半部から多く出土した。

出土遺物には器台(1)や甕(2～4)がある。1は脚台部で、底径8.6cm。外面はヘラ磨きで赤彩がなされる。2は甕の口縁部で口径26cm、色調は黄褐色を呈する。3は小型甕で、口径16cm、外面は刷毛目が施される。4は複合口縁の甕で口径20cm。色調は赤褐色を呈する。古墳時代前期に属する。

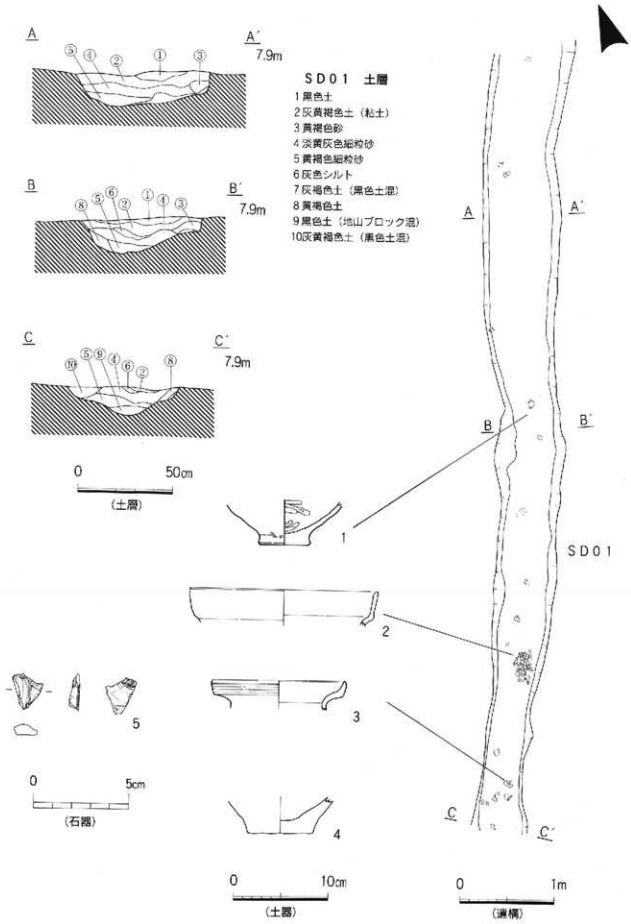
SD37 調査区の東部にあり、幅20～30cmの細長い溝である。溝内から高杯の脚台部1点が出土した。底径9.6cm。外面は赤彩がなされる。古墳時代前期に属する。

SD15（第7図） 調査区の北部にあり、北西から南東方向へやや湾曲しながらのびる。幅40～50cm、深さ15～40cmを測る。東へいくにつれ深くなる。土師器、須恵器の出土がある。平安時代に属する。

SD13・14 調査区の北西部にあり、平行する東西溝である。幅30～80cm、深さ10～15cmを測る。SD13から中世土師椀、SD14からは珠洲焼甕片が出土した。中世に属する。

5 穴

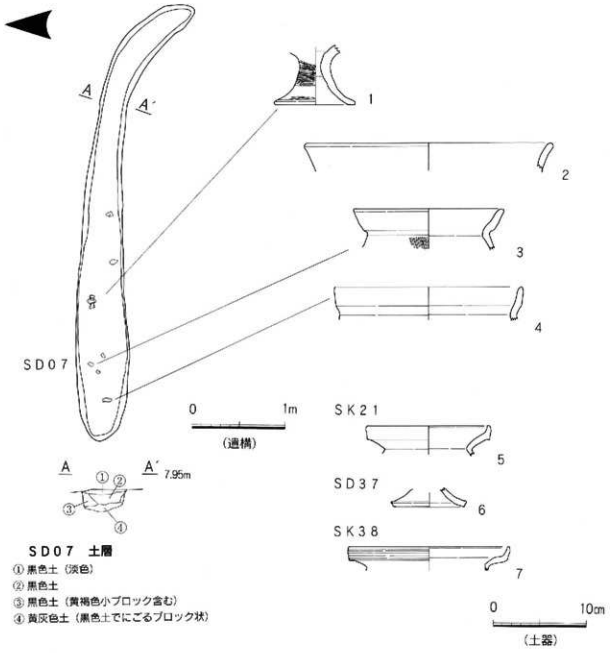
SK21 調査区の北西部にあり、不定形の浅いくぼみ状である。複合口縁の甕の口縁部が出土した。口径13cm、色調は褐色を呈する。古墳時代前期に属する。



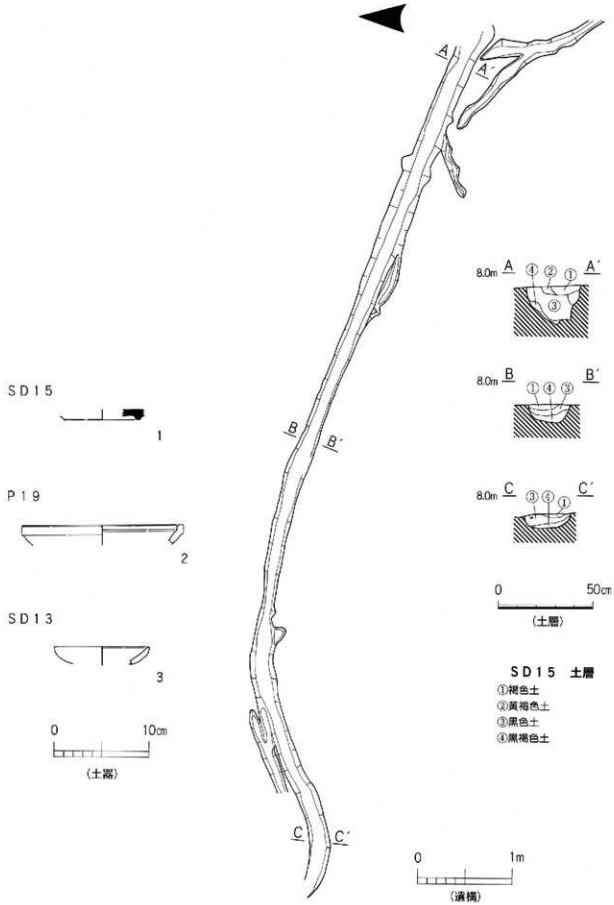
第５図　SD01　遺物出土図（1/40）・**出土遺物**（土器は1/4、石器は1/2）

ＳＫ38　長径1.5m，短径0.8mの楕円形プランで、重複するSD01より古い。３本の擬凹線を施した複合口縁の甕の口縁部が出土した。口径17㎝。色調は褐色を呈する。古墳時代前期に属する。

Ｐ19　調査区の南東部にあり、径65㎝の円形の穴である。土師器の甕が１点出土した。長胴甕の口縁部で、口径17㎝。口縁端部は肥厚し、内面側を丸め、外面は面取りがなされる。平安時代前期に属する。　（山崎）



第４図　溝　SD07　遺構図（1/40）**・出土遺物**（1/4）



第7図 溝 SD15 遺構図 (1/40) ・出土遺物 (1/4)、その他遺構出土遺物 (1/4)

6　包含層出土の遺物（第８図）

北東部の旧河川跡の覆土中からの出土が多く、包含層として一括して取扱った。

古式土師器、須恵器、土師器、珠洲焼、越中瀬戸焼、砥石がある。

古式土師器(1～4)　甕の口縁部である。２は複合口縁で、端部はやや外反する。３，４の口縁端部は短く外側へつまみ出されている。古墳時代前期に属する。

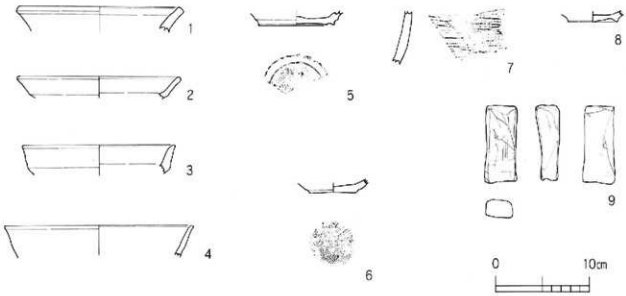
須恵器(5)　杯Ｂの底部で、回転糸切痕を残す。高台部は小さく三角形状に作り出されたもので、底面と同じ高さとなる。体部は高台部からすぐに立ち上がり、外反する。平安時代前期（10世紀前葉）に属する。

土師器(6)　底面に回転糸切り痕を残す椀で内面は丁寧にヘラミガキがなされる。平安時代前期（９世紀後半）に属する。

珠洲焼(7)　中甕の体部で、外面の並行叩きは浅いが比較的緻密である。室町時代と推定される。

越中瀬戸焼(8)　小皿底部で、飛散した鉄釉が外面に付着する。江戸時代に属する。

砥石(9)　緻密な凝灰岩質の砥石で、図右面が凹面となり、よく使い込まれている。長軸に対し直交方向の線条痕が多く残される。中世と推定される。　（古川）



第８図　包含層出土遺物（1/4）

Ⅳ　富山市飯野新屋遺跡出土井戸枠の樹種識別結果

富山県林業技術センター木材試験場
製品開発課　主任研究員　長谷川益夫

1．試　料

富山市飯野新屋遺跡(IA93)出土井戸枠（古墳時代前期）から採取した5点

2．識別方法

採取木片から木口、板目、柾目面の薄切片をそれぞれ切取した。これらを100%エタノール、100%キシレンで脱水・置換して、Bioleitキシレン溶液で封入しカバーグラスを掛け、永久プレパラートとした。

作製したプレパラートを顕微鏡下で観察し、木材の組織解剖的特徴[1-3]を調べた。観察された特徴項目によりパソコン(NEC製 PC-9801)を使用して樹種検索[4]を行った。また、同時に切片の顕微鏡像を撮影記録した。撮影倍率（焼付け時の引伸ばし倍率を含まない）は10X, 50Xの2レベルとし、撮影レンズはいずれも2.5Xのものを使用した。

参考文献

1）島地　謙, 伊東隆夫：図説木材組織, 地球社, 1982.
2）島地　謙：木材解剖図説, 地球出版, 1970.
3）林昭三：日本産木材顕微鏡写真集, 京都大学木質科学研究所, 1991.
4）島地　謙, 須藤彰司, 原田　浩：木材の組織, 森北出版, 1976.
5）小林彌一：本邦における針葉樹材のカード式識別法, 林業試験場研究報告第98
6）長谷川益夫：国産広葉樹材／針葉樹材識別システム(MS-Access® for Win), (未発表).

3．識別結果

各試料ごとの識別結果と根拠を顕微鏡写真を添えて示す。試料の樹種は、いずれも樹脂細胞(Resin cell)と大型の有

試料	識別結果	樹種特徴	
		特徴コード	その他(写真番号)
IA93-No.2	スギ Cryptomeria japonica	/034/038/041/049 /056/059	仮道管放射壁に大型の有縁壁孔対あり。樹脂細胞が晩材部に散在。(1、2、3)
IA93-No.3	スギ Cryptomeria japonica	/034/038/041/049 /056/059	仮道管放射壁に大型の有縁壁孔対あり。樹脂細胞が晩材部に散在。(4、5、6)
IA93-No.5	スギ Cryptomeria japonica	/034/038/041/049 /056/059	仮道管放射壁に大型の有縁壁孔対あり。樹脂細胞が晩材部に散在。(7、8、9)
IA93-No.6	スギ Cryptomeria japonica	/034/038/041/049 /056/059	仮道管放射壁に大型の有縁壁孔対あり。樹脂細胞が晩材部に散在。(10、11、12)
IA93-No.7	スギ Cryptomeria japonica	/034/038/041/049 /056/059	仮道管放射壁に大型の有縁壁孔対あり。樹脂細胞が晩材部に散在。(13、14、15)

縁壁孔対（Bordered pit pair）を有する針葉樹であった。

注）　識別根拠

／　明瞭に認められる

針葉樹の特徴コードと組織的特徴一覧

０３４　軸方向柔細胞は散在状

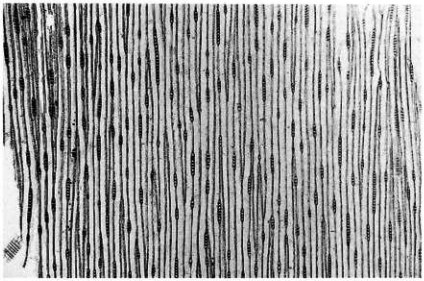
０３８　１～３個の窓状分野壁孔

０４１　スギ型分野壁孔

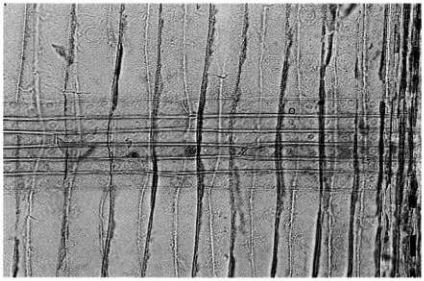
０４９　インデンチャー

０５６　放射組織１５細胞高以下

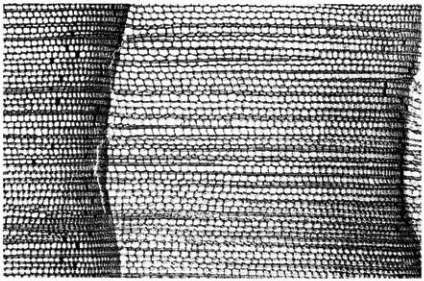
０５９　濃色の樹脂様物質



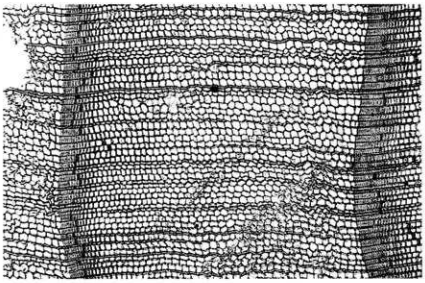
1
井戸SE03　No.2　板材
木　口　断　面　　10×



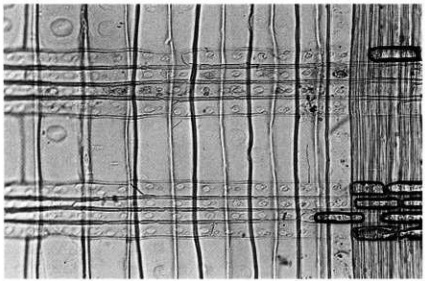
2
同　上
柾　目　断　面　　10×



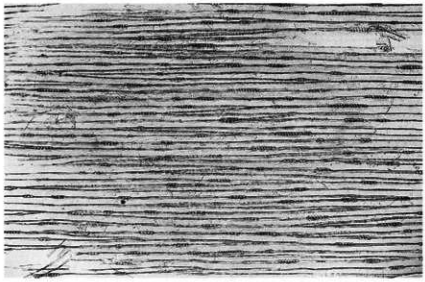
3
同　上
板　目　断　面　　10×



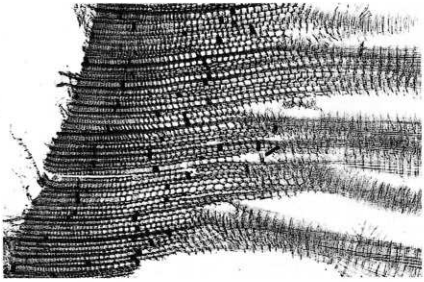
4
井戸SE03　No.3　板材
木　口　断　面　　10×



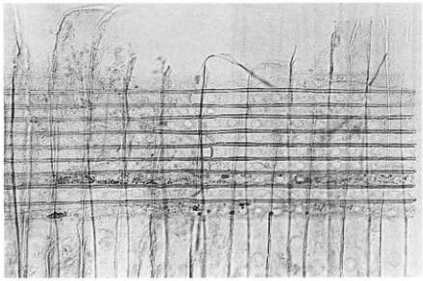
5
同　上
柾　目　断　面　　50×



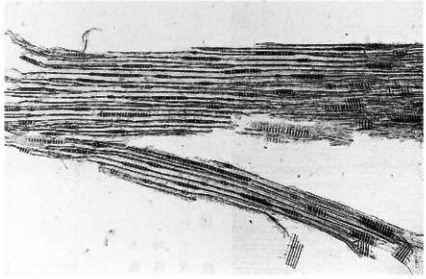
6
同　上
板　目　断　面　　10×



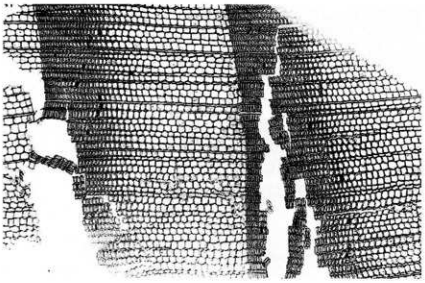
7
井戸SE03　No.5　板材
木　口　断　面　　10×



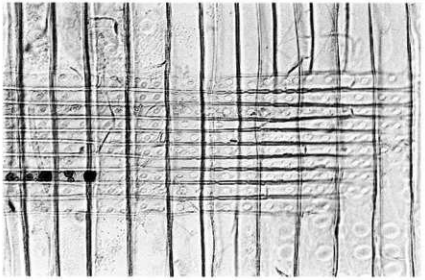
8
同　上
柾　目　断　面　　50×



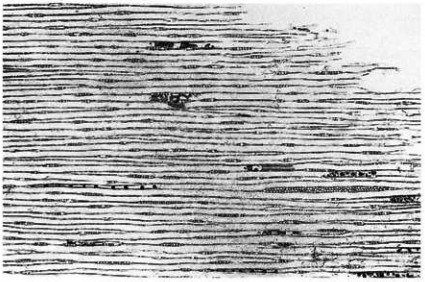
9
同　上
板　目　断　面　　10×



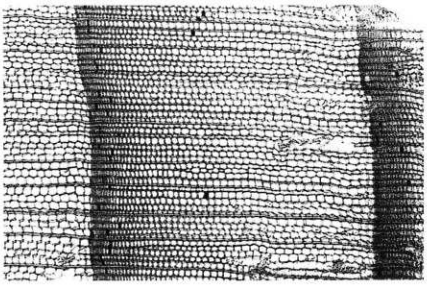
10
井戸SE03　No.6　板材
木　口　断　面　　10×



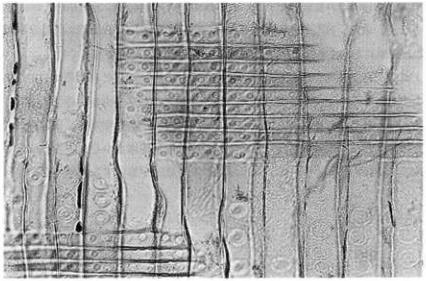
11
同　上
柾　目　断　面　　50×



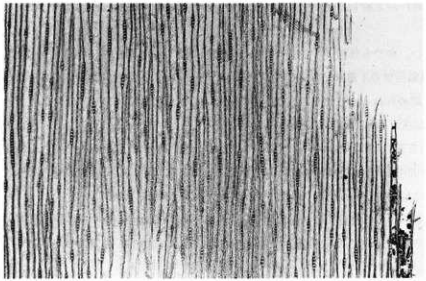
12
同　上
板　目　断　面　　10×



13
井戸SE03　No.7　板材
木　口　断　面　　10×



14
同　上
柾　目　断　面　　50×



15
同　上
板　目　断　面　　10×

V　まとめ

1　遺跡の性格について

飯野新屋遺跡は、主要地方道宮山環状線建設に伴って２度にわたる発掘調査が行われた。調査地は遺跡の中央部の東縁辺にあたる箇所と推定され、古墳時代前期（月影式期）を中心とした集落遺構が検出されている。

今回の調査地は、1986年調査地の北北西約50mにあり、過去の調査同様、遺跡の東縁辺にあたる箇所である。1986年の調査では、旧河川（大坪川支流）に面して月影式期の掘立柱建物が確認されており、集落の内部であることがわかった。今回調査では古墳時代前期に属する明瞭な遺構は、井戸跡１基と溝１条を検出したのみで、建物の存在は確認されなかったことから、この地点が遺跡の北東部境界付近にあたると考えられる。

また、過去の調査でも中世段階の陶器類が出土していたところであるが、今回調査では、旧河川の落ち込みの傾斜地から、はじめて中世と推定される井戸跡が１基検出された。建物等はほっきり認められないが、井戸の存在は集落の存在を裏付けている。

近年、遺跡の東方にある微高地上から弥生時代後期から古墳時代前期に営まれた集落遺跡の発見が相次いでいる。宮町遺跡は、飯野新屋遺跡の東約500mに位置し、1994年の発掘調査で法仏式（塚崎１式）から月影期の井戸群６基と、集落を取り巻くと推定される溝跡が検出された。また、宮町遺跡の南方にある小西北遺跡からは月影期の土坑が検出されている。分布調査の結果、その他の周辺遺跡においても弥生後期から古墳前期の土器等が採集されている。

このように飯野新屋遺跡周辺の扇状地上には、弥生後期から古墳前期の集落が多く存在することが次第に明らかになってきた。飯野新屋遺跡の西約1.5kmにある「ちょうちょう塚」は、その規模や区画帯を有する点からみて出現期古墳として評価がなされているが、在地の首長墓と考えられるこの古墳の出現の背景として、弥生後期法仏期以降急激に増加したこれら扇状地上の遺跡群が位置付けられる。遺跡の分布からみて、ちょうちょう塚を中心に半径2.5kmがそのエリアと推定される（第９図）。その東側の常願寺川左岸や右岸にも当該期の集落遺跡が集中する傾向があり注目される。

（古川）

2　井戸の構造について

井戸SE03は、丸太を分割して刳り抜き組み合わせたもので、宇野分類（宇野1989）によるとＢⅠ・ｂ１類（組合せがない丸太刳抜き井戸）になる。丸太を刳り抜いた井戸は、弥生時代中期、奈良県唐古遺跡、最近では佐賀県土生遺跡から発見されている。古墳時代は素掘り井戸が主流で、井戸枠をもつものは、畿内および中国地方、北陸地方に存在する。

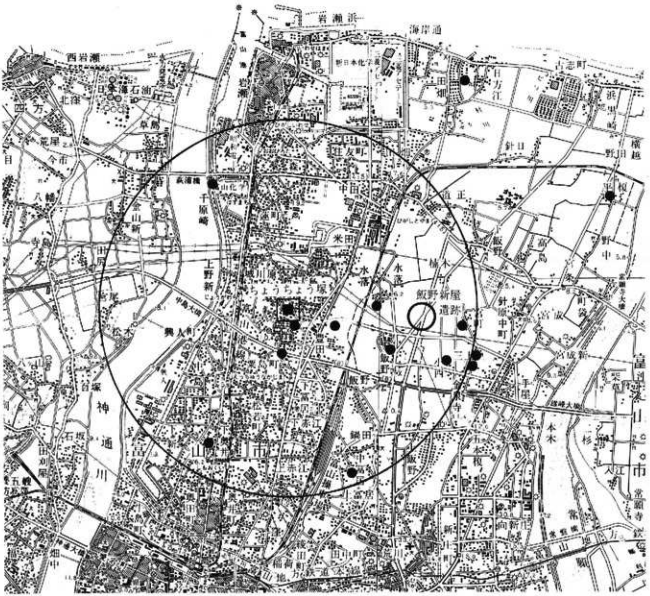
丸太刳抜き井戸は類例がきわめて少ない。中でも分割刳抜きは、岡山県百間川遺跡SE114（岡山県教委1989）,滋賀県古身西遺跡SE３（守山市教委1988）,群馬県三ツ寺Ⅰ遺跡２区２号井戸（群馬県教委1988）があり、北陸でも富山県江上Ａ遺跡SE26,石川県金沢市田中Ａ遺跡に認められる。そのうち三ツ寺Ⅰ遺跡は豪族居館とされており、分割刳り抜き井戸が有力氏族の集落に採用されたことは注目されるところである。

藤田三郎氏は、丸太刳抜き井戸の技術を弥生時代前期から発達した木工技術の延長線にあるものと理解している（藤田1988）。井戸枠の中でも、岡山県百間川遺跡SE114例のように木造舟の再利用と考えられているものや、跡２区２号井戸のように合わせ口式になったものもあり、木工技術の進歩を確かに見い出すことができる。

宇野氏によると　「――ｂ期（弥生後期～古墳時代）に木組の井戸が広く用いられるようになり、木組の井戸に一定の地域差が生じている。」（宇野前掲）とあるが、丸太分割刳抜き井戸を作っていた地域は、中国地方から中部・関東地方ということが言える。

出土した井戸枠板材は、６枚であるがそれだけでは井戸を囲うことができない。１枚欠けていると考えることができる。南半分が崩壊して全形を把握しづらいが、北側の残存部から当初は７枚で構成された直径80cmの円形の井戸と推定される。１枚欠けた状態で井戸を機能させるために、修復が行なわれた。井戸枠下部から、十字に組まれた板材が井戸枠設置後に入れられていることから、これが井戸枠の崩れ止めと井戸底の土止めとなったのではないかと考えられる。

丸太刳抜き井戸の例は少なく、他の遺跡の場合枠板の枚数が２～３枚であるのに対し、本遺跡では７枚と多いのは注目されることで、技術的にも稀な例と言える。（山崎）



第９図　ちょうちょう塚周辺の集落遺跡の分布（1：50,000）
円は半径2.5kmを示す

表1　丸太分割刳抜き井戸の比較

	掘り方（径）	（深さ）	枠の板数	枠板の厚さ	備考
飯野新屋遺跡(富山県)	1.8mの円形	1.5m	7枚	2.5～3.5cm	
江上A遺跡(富山県)	1.0mの円形	0.7m	2枚	3cm	
田中A遺跡(石川県)	2.15×1.8mの円形	1.1m	2枚	?	
百間川遺跡(岡山県)	1.8×1.5mの菱形	1.7m	2枚	約6cm	割竹形の材2枚
横江遺跡　(滋賀県)	1.2×1.0mの方形	?	2枚以上	2.0～3.0cm	
吉身西遺跡(滋賀県)	2.1mの円形	1.4m	3枚	10cm	
三ツ寺遺跡(群馬県)	1.46×1.6mの円形	3.5m	2枚	6cm	刳抜き合わせ口式

3　出土土器について

飯野新屋遺跡では、3回の発掘調査が行われ、古墳時代前期の集落跡の内容が知られるようになった。1983年度の調査では祭祀をともなう井戸から良好な月影期の一括土器が出土し、編年を考える上で重要な基準となった（富山市教委 1984）。

今回の調査では、SD01、SD07、SE03から比較的まとまった土器の出土があったことから、過去の調査例を踏まえた遺構単位の編年を考えてみたのが第2表である。

SD07の器台は底部高が低く、小杉町南太閤山Ⅰ遺跡3号方形周溝墓（富山県教委 1983）出土のものに類似する。月影Ⅱ式でも古い時期に属すると思われる。　SD01にはしっかりとした底をもつ壺があり、古府クルビ期に近いものと思われる。また、SE03の甕の口縁部はくの字状を呈し、体部上半に最大径をもつもので、大門町串山新遺跡第1号住居跡（大門町教委 1981）出土のものと類似する。底部径が小さくなり、丸底に移行する直前の段階のものと考えられる。1983年度調査の井戸P6より古い段階のものと思われる。したがって、本遺跡の遺構は月影Ⅱ式及び古府クルビ期前半の範囲に含まれるとすることができる。　（山崎）

		飯野新屋遺跡の遺構	
			畷山遺跡
月影Ⅱ期	1	ＳＤ０７(1993年度調査)	
	2	Ｐ７　(1983年度調査)	ちょうちょう塚 杉谷Ａ遺跡１号方形周溝墓
		ＳＤ０２(1986年度調査)	杉谷Ａ遺跡２号方形周溝墓
	3	ＳＫ０３(1986年度調査) ＳＥ０３(1993年度調査)	
	4	Ｐ　６　(1983年度調査) ＳＫ０１(1986年度調査) ＳＤ０１(1993年度調査)	杉谷４号墳（四隅突出型）
古府クルビ期		溝状遺構１(1983年度調査)	

〔参考文献〕

石川考古学研究会	1986	シンポジウム「月影式」土器について発表要旨
宇野隆夫	1989	井戸考　「考古資料にみる古代と中世の歴史と社会」
岡山県教育委員会	1989	百間川米田遺跡３（旧当麻遺跡）
金沢市教育委員会	1992	金沢市四中Ａ遺跡
上市町教育委員会	1981	北陸自動車道遺跡発掘調査報告－上市町遺構編－
群馬県教育委員会	1988	上越新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告第８集　二ツ寺Ⅰ遺跡
滋賀県教育委員会	1986	横江遺跡発掘調査報告書Ⅰ
大門町教育委員会	1981	富山県大門町串田新遺跡Ⅱ　北東地区の範囲確認調査
富山県教育委員会	1983	都市計画道路七美・太閤山　高岡線内遺跡発掘調査概要（1） 高山遺跡　東山Ⅰ遺跡　東山Ⅱ遺跡　表野遺跡　南太閤山・Ⅱ遺跡
富山県教育委員会	1984	都市計画道路七美・太閤山　高岡線内遺跡発掘調査概要（2） 南太閤山Ⅰ遺跡　南太閤山Ⅱ遺跡
富山市史編さん室編	1987	富山市史　上巻，富山市
富山市教育委員会	1974	富山市豊田遺跡発掘調査報告書
富山市教育委員会	1975	富山市杉谷（Ａ．Ｇ．Ⅱ）遺跡発掘調査報告書
富山市教育委員会	1976	富山市遺跡地図－埋蔵文化財包蔵地所在地地図
富山市教育委員会	1993	富山市遺跡地図－埋蔵文化財包蔵地所在地地図（改訂版）
富山市教育委員会	1984	飯野新屋遺跡発掘調査概報
富山市教育委員会	1986	富山市飯野新屋遺跡試掘調査報告書
富山市教育委員会	1987	富山市飯野新屋遺跡－主要地方道富山環状線工事に伴う古墳時代情報集落跡の調査概要
富山市教育委員会	1994	富山市宮町遺跡(平成6年度)現地説明会資料
藤田三郎	1988	弥生時代の井戸　「同志社大学考古学シリーズⅣ　考古学と技術」
藤田富士夫・駒見和夫	1981	ちょうちょう塚の概要と若干の考察　『大境』第7号　富山考古学会
守山市教育委員会	1988	守山市文化財調査報告第32集　吉身西遺跡発掘報告書
吉岡康暢	1994	中世須恵器の研究

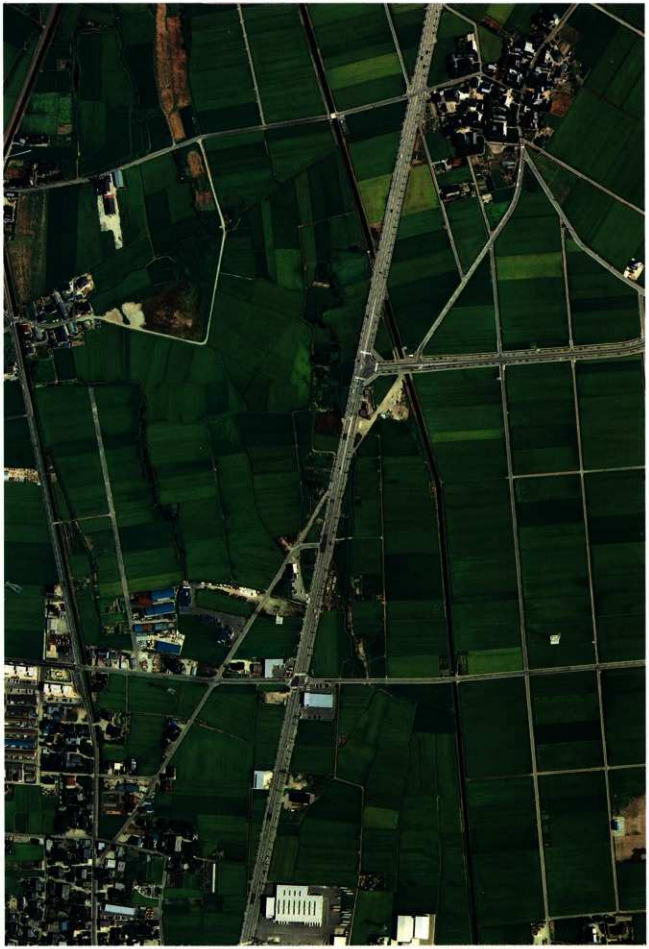
報 告 書 抄 録

ふりがな	とやましいいのあらやいせきはっくつちょうさがいよう
書　名	富山市飯野新屋遺跡発掘調査概要
編著者名	古川知明、山崎　栄、長谷川益夫
編集機関	富山市教育委員会
所在地	〒930　富山県富山市新桜町7番38号　　TEL（0764）43-2138
発行年月日	西暦　1995年　3月　30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
いいのあらや 飯野新屋遺跡	とやまけんとやましいいのたかだわり 富山県富山市飯野字高田割	16201	203	36度 43分 40秒	137度 15分 20秒	19931013 ~19931118	1,065	自動車修理工場建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
飯野新屋遺跡	集落跡	古墳（前期） 平安（前期） 中世	井戸2基、溝、穴	古式土師器、土師器、須恵器、土師質土器、珠洲焼、砥石、越中瀬戸焼	井戸1基（古墳時代前期）は、井戸枠を持つもの

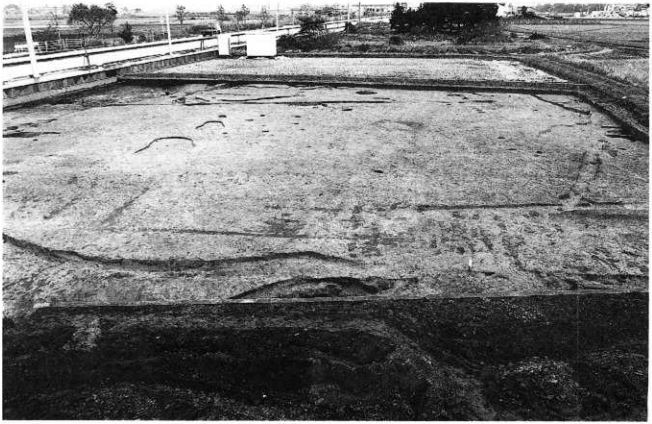
写真図版



飯野新屋遺跡付近航空写真（平成６年８月撮影　縮尺１：5,000）

発掘調査区（南上空から）

調査区全景（1：280）　左が北

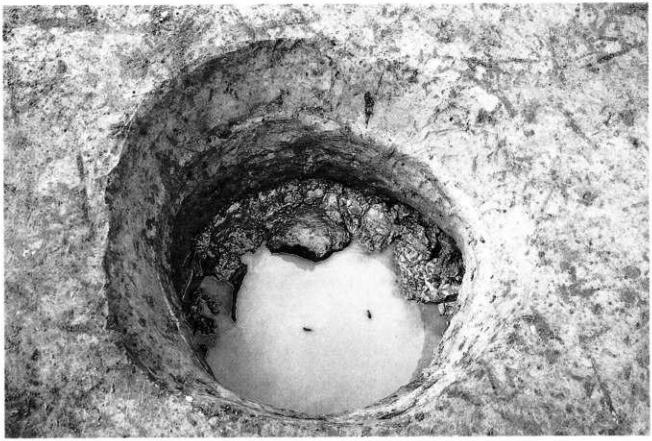


調査区全景（北から）

調査区南東部（西から）

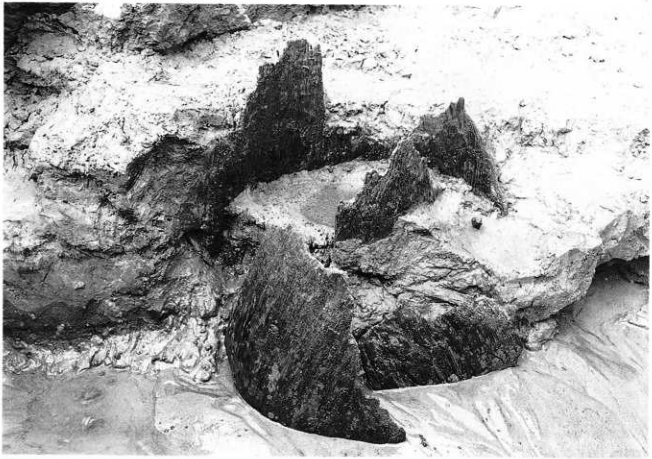
調査区南半（東から）

調査区北東部（北西から）

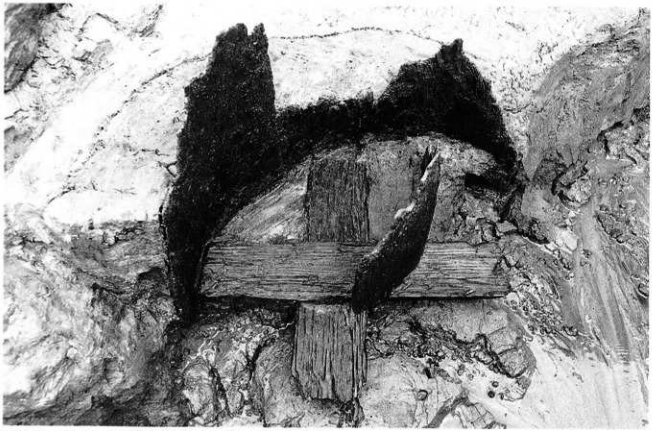


井戸跡　SE03（南から）

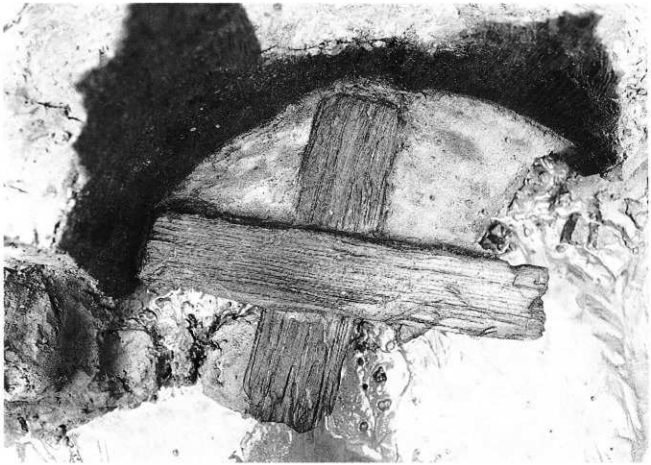
井戸跡　SE03　断面・土器出土状態（南から）



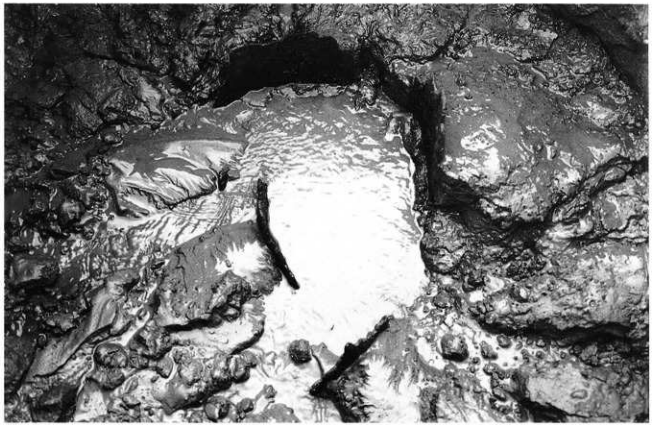
井戸跡　SE03　井戸枠（南から）



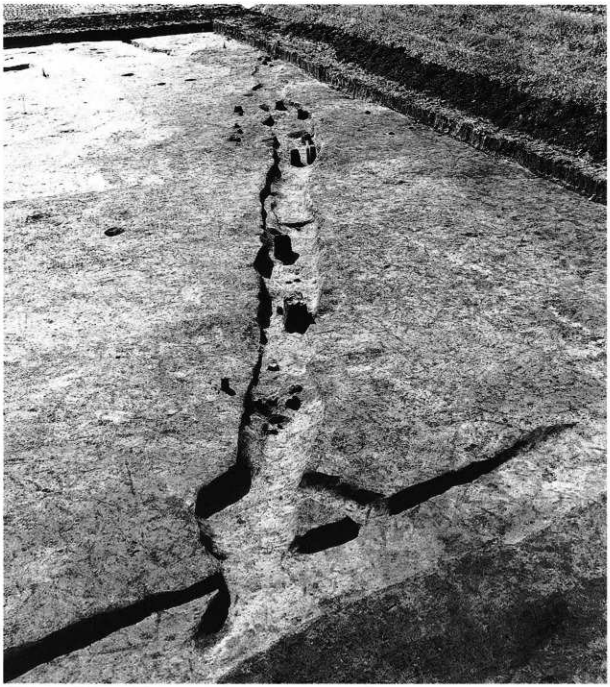
井戸跡　SE03　井戸枠（南半の井戸枠板を除いた状態）



井戸跡　ＳＥ０３　井戸枠内底の板組



井戸跡ＳＥ０３　調査時の湧水状況



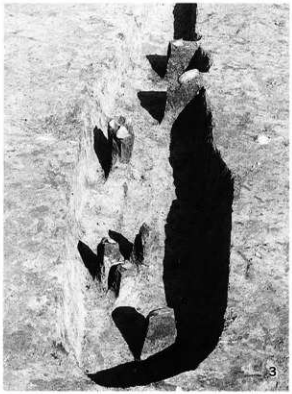
▲ 溝 SD01（北東から）

◀ 溝 SD01
土器出土状態

1　溝 SD15（北西から）

2　溝 SD14（手前）・SD15
（西から）

3　溝 SD07
土器出土状態（西から）



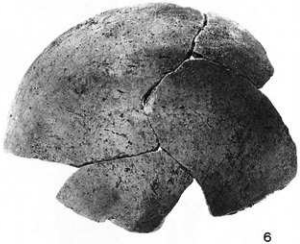
1

2

3

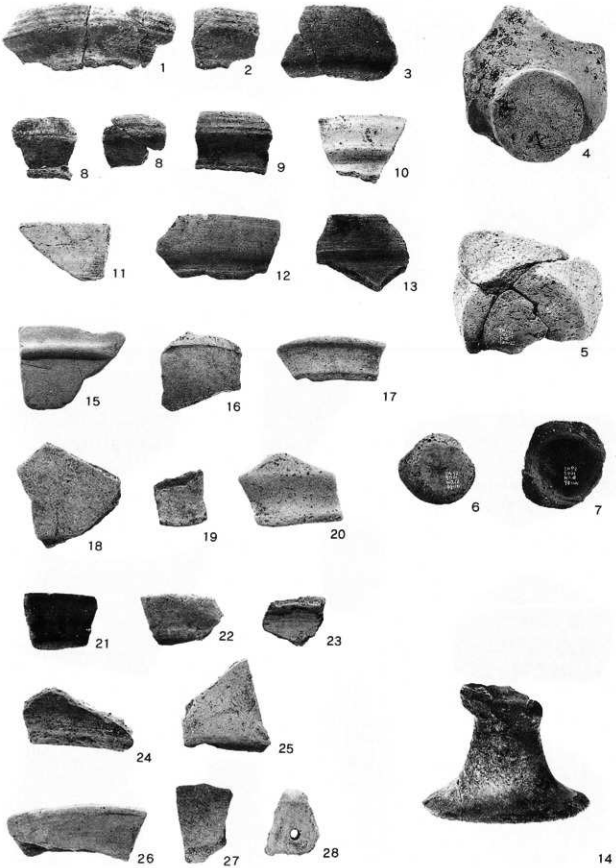
4

5


6

7

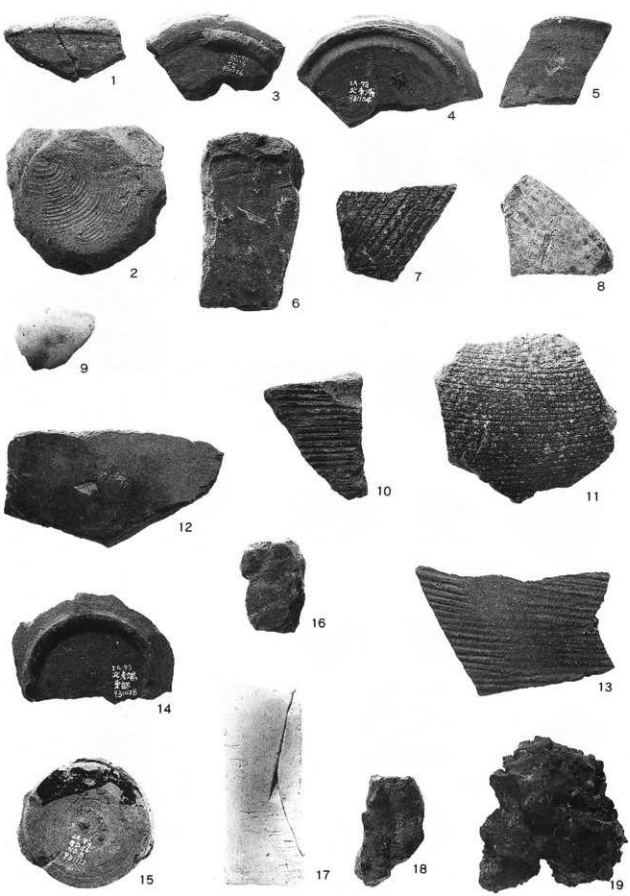
SEO3　出土土器 (1/2)（1は2/5）



遺構・包含層出土土器 (1/2) 古墳時代

SD01 (1～7)、SK21 (8)、SD38 (9)、SE03 (10)、SD07 (11～14)、
SD04 (15)、SD14 (16～18)、SD37 (19)、SD36 (20)、包含層 (21～28)

図版12



遺構・包含層出土遺物 (2/3)

土師器：P19（1）、包含層（2）、須恵器：SD15（3）、包含層（4～7）、SD36（8）、
土師質土器：SD13（9）、珠洲焼：SD14（11）、包含層（12～13）、越中瀬戸焼：包含層（14）、
SD36（15）、砥石：包含層（16～17）、鉄滓（18～19）

富山市飯野新屋遺跡発掘調査概要

編集・発行　富山市教育委員会
富山市新桜町７番３８号
発行日　平成７年３月３０日